

〈エッセイ〉

写真：山内創 文：坂本麻人

編集：武田俊 編集協力：若林輝

構成：飯沢未央 PDF 制作：稲田駿平

ドキュメンタリー映画監督・坂本麻人が問いかける
サクラマスの「死に様」を通した「生き様」

猶予された鱒たち



Figure 1. 桜色に染まる産卵期のサクラマス。

同じサケ科の魚でありながら、異なる一生を送るサクラマスとヤマメ。川に留まり何度も繁殖する可能性があるヤマメに対し、サクラマスは海で大きく成長し、一度きりの産卵で命を終える。その過酷な運命とも言える「死に様」は何を問いかけるのか。ドキュメンタリー映画監督・坂本麻人が文学や自らの体験と重ね合わせ、考察した。

静かな冬を越え、雪はやがて溶け、川は轟々と水かさを増していく。春の訪れとともに、海へ旅立つ者と、旅を終え帰ってくる者とがすれ違う。桜色のドレスを身にまとい、秋に開かれる舞踏会を目指して——。わずかな余生を過ごすサクラマスと、川に残る猶予されたヤマメたちは、再び出会うのだ。

「鱒」という呼び名から “*Oncorhynchus masou*” という学名が付けられたサケ科サケ属の魚、サクラマス（桜鱒）。その幼魚期や、川に残留する河川型をヤマメ（山女魚）と呼び、溪流の女王として親しまれてきた。その中でも、銀毛変態 [1] を経て海へと降海する回遊型をサクラマスと呼んでいる。もっとも種としては同種であり、ヤマメをサクラマスと呼んでも間違いではない。

サクラマスは、他のサケ科魚類と同様に川で生まれ、海へ回遊し、再び川に戻って産卵するという生活史をもっている。ただサクラマスに限っては、川に残るか、海に降りるかが成長過程で選択されるという特徴があり、その選択は、幼魚期の成長度合いによって決まるとされている。しかし、その生活史には未解明の点も多い。

川に残留することを選んだヤマメは、海へは行かず、淡水域で複数年にわたり産卵に参加するものもいる。小型ゆえに一度に残せる子孫は限られるが、その命は一度きりではない。また多数回繁殖ができたとしても繁殖時の闘争は激しいことから、長寿になれるとは限らないが、寿命にバリエーションを持つことができる。

一方、海へ降るサクラマスは、川に残ったヤマメと比べて大きなものでは数倍以上に成長することで、一度の産卵で多くの命を残すことができる。（体サイズに対して、三乗で卵の数も増加する）しかし、その代償として、産卵後にその命を終えることになる。産卵を終えたサクラマスたちは、「ほっちゃれ [2]」となり、動物に喰われ、腐敗し、やがて微生物に分解され、大地へと還っていく。

寿命が不確定であるヤマメに対して、サクラマスの特徴は、海へ降りると決めた瞬間から、確実に死へのカウントダウンが始まるということだ。まさにサクラマスにとって、産卵とは「最後の舞踏会」なのだ。

この究極の選択は、本当に幼魚期の成長度合いだけに依るものなのだろうか。大海原へ旅立つサクラマスたちは、その旅の果てに“死”が待っていることを知っているのだろうか。あえて生態学の視座を離れ、彼らの内なる死生観に想像をめぐらせてみたい。

ヤマメたちが“死”への恐れを抱いているとしたら、多くはヤマメとして川に残る道を選ぶだろうし、降海後の行く末を知らない訳が無い。なぜなら、若いヤマメたちは、朽ちていく親の姿を確かに見えてい

るはずだからだ。自らの意思で選択できず、定められた運命に従うだけなら、それは、まるでエリアス・カネッティの戯曲『猶予された者たち』で描かれたような、あらかじめ寿命が定められた世界を彷彿させる。その物語では、すべての人に、それぞれ寿命年数が名として与えられる。決められた年月しか生きられないという過酷な運命は、同時にいつ死ぬかわからないという不安を払拭させるとも言える。しかし、そこに疑問を抱く主人公・五〇は、定められた死の虚構を暴き、運命を変えようとする。

サクラマスは、死の不安から解放された存在のようにも思える。あるいは、まだ川に残留するという選択肢を持たなかった時代があるとすれば、その運命に抗い、自由を求めたサクラマスこそが、ヤマメとして川に残る道を切り拓いたのかもしれない。それはまさに自由を得ようとした主人公・五〇のようにも思えてくる。サクラマスの生に秘められた、知られざる物語がそこにはあるのだろう。

私がこのような想像をめぐらせるきっかけとなったのは、取材で訪れた北海道・朱太川での出来事だった。桜色の婚姻色に輝くサクラマス——尾鰭で礫を掘る雌と、競争し合う雄たちが、残留するヤマメたちとの再会を果たし、四方八方で水飛沫を上げながら産卵し命を尽くすその様子を、私はただ見つめ続けていた。

それは、まるで命尽きるまで踊る中世ヨーロッパの寓話『死の舞踏』や、生贄が死ぬまで踊り狂う儀式を表現したイゴール・ストラヴィンスキーの『春の祭典』をも連想させた。それだけではなく、その姿は、かつて私自身が立ち会った愛する人の最期の瞬間を思い出させた。その生は尽きるまで衰えず、眠るように息を引き取る彼女の姿と、緩やかな流れにたゆたいながら、静かに死を待ち朽ちていくサクラマスの姿が、時を超えて重なっていった。

前作『ミルクの中のイワナ』(2024 年公開)で、森田健太郎 教授(東京大学大気海洋研究所)によって語られるイワナの「生き様」と響き合うように、次回作の映画『サクラマスのラストワルツ』では、福永真弓 准教授(東京大学 新領域創成科学研究科)が、作家の石牟礼道子の言葉をなぞって語られた形見の世界。サクラマスたちの産卵を見守る川や森も、“ほっちゃれ”を喰らう動物たちも、死の瞬間に立ち会った私も、サクラマスたちの形見となって生きていくことになるのではないだろうか。サクラマスたちを再び私たちの世界に招き入れるためにも、もう一度、“死に様”を通して“生き様”を語り合う時が来ているのかもしれない。

注釈

- [1] 銀毛変態とは 海に降海する際に、体色が銀白色に変化し、海水への適応を示す現象
- [2] ほっちゃれとは 各地に残る方言で、産卵を終えて力尽きた鮭や鱒のこと



Figure 2. 産卵後、“ほっちゃんれ”となったサクラマスとヤマメ

執筆者プロフィール

坂本麻人（さかもと・あさと）

大阪生まれ。東京在住。ドキュメンタリー映画監督。2024 年公開のドキュメンタリー映画『ミルクの中のイワナ』を発表。また岩手県・遠野市を舞台に死生観をテーマにした短編作品やまた遠野における民俗文化をめぐるツアー「遠野巡灯籠木」の演出、プロデューサーとして活動。現在、2026 年春より全国劇場公開に向けて、ドキュメンタリー映画『サクラマスのラストワルツ』を準備中。

新作映画情報 『サクラマスのラストワルツ』

海へ旅立ったヤマメは、サクラマスとなって再び春に川へ帰ってくる。森と海を繋ぐサクラマスの世界は、今、私たちの社会によって大きく阻まれている。近代化と共に分断された川、技術に頼る近代漁業、迫る温暖化、そして私たちがもたらしてきた複雑に絡み合う問題。もう一度、私たちは、サクラマスと共に川へ帰ることができるのだろうか。かつて私たちと自然を紡いできたサクラマスの知られざる世界に迫るドキュメンタリー。

出演者：

中村 太士（北海道大学 大学院農学研究院，名誉教授）

福永 真弓（東京大学 新領域創成科学研究科，准教授）

森田 健太郎（東京大学 大気海洋研究所，教授）

佐藤 拓哉（京都大学生態学研究センター，准教授）

坪井 潤一（国立研究開発法人 水産研究・教育機構，主任研究員）

島田 克也（一般社団法人 日本環境アセスメント協会，会長）

有賀 望（豊平川さけ科学館，学芸員）

監督・編集・構成：坂本 麻人

構成協力：若林 輝

音 楽：Daisuke Tanabe, Yosi Horikawa

企画：一般社団法人 Whole Universe

制作：THE LIGHT SOURCE

協力：Patagonia International.Inc

機材協力：Sigma Corporation、MEDIAEDGE 株式会社